



EXPO 2005 AICHI JAPAN

市民プロジェクト

「宇宙船地球号」

PLUS用資料・夏号0507



北九州市立大学
九州フィールドワーク研究会(野研)

■「北九州市立大学」発→「愛・地球博」行

北九州市立大学で生まれたスタードームが、愛知県でおこなわれている愛・地球博の市民プロジェクト「宇宙船地球号」に出品される。

「宇宙船地球号」では8月6日から21日まで万博瀬戸会場の海上広場AエリアおよびDエリアにて直径6メートルのスタードームの展示し、18メートルドームの組立ワークショップ、ドームを利用した竹楽器の演奏とバリダンス公演、リサイクル傘によるカラフルな天幕の展示などを予定している。8月14日には会場内の対話劇場にて未来の暮らしを考える講演会「宇宙船地球号乗組員会議」がおこなわれる。

■スタードームとは

スタードームとは、北九州市立大学の教員や学生、市民ら(約30名)で活動する九州フィールドワーク研究会(野研)が、2000年より4年がかりで考案した、竹などの身近な素材を使った半球形のドームである。スタードームの開発にあたっては、バックミンスター・フラーが発明したジオデシックドームを参考に、誰でもたやすく組み立てられるよう独自の工夫がされている(詳細は別紙「きみだけのそら」企画書を参照のこと)。スタードームを利用したイベントやワークショップ「きみだけのそら」は、2003年にインターネットにて最初のドームを公開して以来、北九州を中心に全国に広がりを見せている。

■かるくしなやかな未来へ

スタードームが目指しているものは、軽くてどこにでも持ち運べる新しい住まい。誰もが自分だけの空を手に入れることができる空間である。スタードームは竹資源の有効利用というだけではなく、人類の新しい生き方を提案するものであると私たちは考えている。それは重厚長大な思想ではなく軽くしなやかな思想、定住ではなく遊動的な暮らしのありかたである。コンクリート製の巨大建築が立ち並ぶ現代社会に対し、スタードームはもうひとつの未来をめざしているのである。

■愛知地球博「宇宙船地球号」プロジェクトの概要

・明日はとつた。〈宇宙船地球号乗組員会議〉

2005年8月14日(日)11:30開演。愛・地球博 瀬戸会場 市民パビリオン 対話広場。

テーマは、重厚長大な未来ではなくかるくてしなやかな未来。定住ではなく遊動の生活。どこにでもいけるちいさな暮らし。5名の講演者はそれぞれ、スタードームで、小さな島嶼・バナアツで、南極の昭和基地で、人工閉鎖空間・ミニ地球などで、新しく古い体験や新しい思考ツールを通して、未来の暮らしの方向性を模索している。バックミンスター・フラーが夢見た未来の姿を考え、ここから、自然と人間の共生を伝える、もう一つの万博が立ち上げる

新井 真由美 (あらい まゆみ)

日本科学未来館 展示開発室 科学技術スペシャリスト。火星への人類の進出を夢見て幅広く活動を続ける。宇宙と環境。一見背中を向けて歩んでいるように見えるこの2つの科学分野を結ぶ視点を模索している。

木下 靖子 (きのした やすこ)

北九州市立大学 人間文化研究科 大学院生 専攻は人類学。トンガ・バナアツで人の離合集散に関する研究をおこなっている。バナアツ共和国の人口15人の島に3ヶ月滞在、島の環境と生業活動について調査をおこなった経験を持つ。ライフワークは世界平和の具体的な実現。

佐藤 克文 (さとう かつふみ)

東京大学海洋研究所 国際沿岸海洋研究センター 助教授。南極を主たるフィールドとして動物の潜水生理・行動を追っている。昭和基地での越冬経験も持つ。南極の氷上でアザラシに体当たりでハイテク機器を装着する一方で、日本の里山で和竿のタナゴ釣りを趣味とする。

篠原 正典 (しのはら まさのり)

環境科学技術研究所 環境シミュレーション部 研究員。イルカの行動を学ぶ動物行動学者だが、現在、人間を含む人工生態系での物質循環をシミュレーションする「ミニ地球プロジェクト」に参加。最長四ヶ月におよぶ「ミニ地球」での閉鎖居住実験の居住者候補である。

竹川 大介 (たけかわ だいすけ)

北九州市立大学 文学部 助教授。アジア太平洋の海洋民を研究する人類学者。自らも海に潜りながら狩猟採集民の生態学的調査にたずさわる。スタードームを発明し、人類進化の歴史と遊動生活について考えている。

・かるくしなやかな未来へ。〈傘天幕の傑い〉

1991年より傘の生地をリサイクルし、ショッピングバックなどの作品を作ってきた横山夫妻に、万博にむけスタードーム用の特別な天幕をお願いした。1144枚のカラフルな布を継ぎ合わせて作られた傘天幕は美しさと機能性を兼ね備えたみごとな作品である。

横山夫妻の傘布芸術は、通常のリサイクルに対する概念を越えた力強い迫力を見るものに与える。彼らの作品の基底に流れる「もったいない」という言葉は、単に節約や儉約を意味するだけでなく、物にたいする愛着、手作りへのこだわり、そして緻密な美につながる高度な感性であることがわかる。本来人間が持っていた生きるための知恵と技術が急速に失われつつある現在の消費社会において、傘天幕は循環する自然と共存してきた人間の営みをあらためて想起させる存在である。

・ドームマスターへの道。〈スタードーム組立ワークショップ〉

8月6日より21日まで万博瀬戸会場の野外劇場において毎日、18メートルドームの組立ワークショップをおこなう。一回の作業時間は1時間程度で、参加人数は5～20人程度。Aエリアのドームで受付をおこない随時人数が集まればはじめる。指導は九州フィールドワーク研究会認定のドーム棟梁がおこなう。小学生から大人まで、だれでも楽しく大きなドームの立ち上げに参加することができる。参加料は無料。参加者には全員に九州フィールドワーク研究会より修了証が進呈される。8月15日には特別に竹製の小型ジオデシックドーム日球ドームを設置する。

組立は、5～10人の参加者と3～5人のドームマスターでおこなう。マスターのうち、一人は全体的な指導をする。

〈ワークショップの手順〉

- 1 受付・参加者に作業の手順を簡単に説明する
- 2 ドームを立てる
- 3 状況に応じて天幕をかける
- 4 ドーム完成(拍手喝采)
- 5 記念撮影をしたり、踊ったり、ドームの中で休憩したりする
- 6 参加者全員に修了書を進呈する
- 7 状況に応じてドームを解体する

・森のしらべ森のおどろくバリ舞踊 in ドーム〈〉

名古屋で活躍するバリ舞踊のグループ SURYA METU(スルヤ・ムトゥ)の代表印貢陽子と、バリ音楽グループ SUARAS UKUMA による野外ステージをおこなう。バリの舞踊はほんらい寺院などの屋外の森の中で奉納されるものである。海上の森に囲まれた瀬戸会場のスタードームはまさに格好の舞台となる。自然と人が融和するとろけるような暑い夏の島の踊りと音楽を、こころゆくまで楽しんで欲しい。8月6日より17日まで、瀬戸会場海上広場。日替わりで演目は変わり、8月7日は総勢50名のフルメンバー大公演。

・きみだけのそらを創ろう!<スタードームワークショップ>

・きみだけのそらを創ろう!<スタードームワークショップ>

誰でもスタードームを作れるように、スタードーム組立DVDを販売し、円周180cmの小型スタードームキットの組立などのワークショップを実施する。そのほか、九州フィールドワーク研究会(野研)の活動紹介のパネル展示、映像の上映などをA会場のドーム内にて行なう。さらに、スタードームの傘天幕を作ってくださった横山夫妻の活動紹介のパネル展示や、夫妻が傘の生地をリサイクルして作ったショッピングバック「Casa de Pon」の作成キットの配布もおこなう。

<ワークショップ内容>

1. ドーム☆キット組立:担当者3名

熊本の竹職人・藤谷克也氏が加工した竹庇護15本を使い、円周180cmのスター☆ドームの組立をおこなう。(参加料:材料を参加者に購入してもらう)

2. 竹細工(鉄棒人形)組立:担当者2名

熊本の竹職人・藤谷克也氏が加工した竹や竹庇護を使い、竹のおもちゃ(鉄棒人形)の組立をおこなう。(参加料:材料を参加者に購入してもらう)

3. 竹細工(風車)組立:担当者2名

熊本の竹職人・藤谷克也氏が加工した竹や竹庇護を使い、竹細工(風車)の組立をおこなう。(参加料:材料を参加者に購入してもらう)

4. 竹細工(かご)組立:担当者2名

熊本の竹職人・藤谷克也氏が加工した竹庇護16本を使い、竹細工(かご)の組立をおこなう。(参加料:材料を参加者に購入してもらう)

5. ドームキット着せ替え天幕製作:担当者1名

ドームキット用の着せ替え天幕を製作する。参加者が素材を選び、天幕に絵を描いたり、ペインティングすることで「きみだけのそら」を作る。(参加料:材料を参加者に購入してもらう)

6. 傘の布を使ったショッピングバック製作:担当者2名

スタードームの天幕にも使われている傘の布を再利用した生地で、「強さ」と「撥水性」を兼ね備えたショッピングバック「Casa de Pon」を作る。(参加料:無料)

7. 古い布を使った雑貨製作:担当者1名

今の日本人のタンスには、一体どれだけの使わない布があるのだろう。ブランド名に振り回され、積み重なって捨てられていく布たち。その布たちを活かした雑貨を制作することで、布をとってわくわくするあの気持ちを一緒に体験する。(参加料:材料を参加者に購入してもらう)

8. ポストカード製作:担当者1名

スタードームプロジェクトに参加して感じたこと・思ったことを、言葉や絵でポストカードに画く。そしてそのポストカードをあなたの大事な人へ送る。(参加料:材料を参加者に購入してもらう)

■「宇宙船地球号」プロジェクトの連絡先

〒802-8577

北九州市小倉南区北方4-2-1

北九州市立大学

九州フィールドワーク研究会

竹川大介

tel/fax: 093-964-4167

daisuke@apa-apa.net



■関連ウェブサイト

九州フィールドワーク研究会 www.apa-apa.net/~yaken/index.html

スタードーム公式ホームページ www.stardome.jp

北九州市立大学 竹川大介研究室 www.apa-apa.net

■「宇宙船地球号」プロジェクト担当者プロフィール

竹川大介(たけかわだいすけ)

北九州市立大学文学部人間関係学科助教授

人類学者。研究テーマは、アジア太平洋の海洋民にかんする生態人類学。沖縄にはじまり、ソロモン諸島バヌアツ共和国など島嶼国でフィールドワークをおこなっている。

木下靖子(きのしたやすこ)

北九州市立大学人間文化研究科大学院生

専攻は人類学。トンガ・バヌアツで人の離合集散に関する研究をおこなっている。

嘉原優子(よしはらゆうこ)

中部大学人文学部日本語日本文化学科助教授

専門は宗教学／文化人類学。宗教的トランスの研究およびアジアの宗教儀礼の研究をおこなっている。

印貢陽子(おしづみようこ)

1993～1996年インドネシアスラバヤ市在住。その間バリ舞踊、ジャワガムラン、ジャワ舞踊を学ぶ。帰国後、バリ舞踊グループ「スルヤ・ムトゥ Surya-Metu」を結成し、後進の指導にあたるとともに、東海地方で活動中